豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集

吉田城址（II）

1995年3月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集

吉田城址（II）

1995年3月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

例　言

1．本書は、豊橋市今橋町８番地において、土地改良会館（愛知県土地改良事業団体連合会所有）増築に伴い実施された埋蔵文化財調査の報告書である。調査期間は、試掘調査が平成６年６月30日、本調査が平成６年９月１日～同年９月13日である。

2．試掘調査は豊橋市教育委員会が行い、岩原　剛（豊橋市教育委員会生涯学習部文化振興課文化財係）が担当した。また本調査は、愛知県土地改良事業団体連合会から委託をうけた豊橋遺跡調査会が行い、岩原が調査の指導にあたった。本調査、及び報告書作成に関する費用は事業者である愛知県土地改良事業団体連合が負担した。

3．報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、平賀静子の援助をうけた。また、遺構・遺物の写真撮影は岩原が行った。

4．発掘調査並びに本書の執筆に際して、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、高橋洋充（豊橋市美術博物館）両氏の御教示・御協力をいただいた。また発掘作業、整理作業については、土地改良会館ほか、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。

5．本書の執筆・編集は岩原が行った。

6．本書に使用した方位は磁北である。遺物・遺構のスケールはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。

7．本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地 …… 1
２．歴史的環境 …… 2

第２章　調査の経過

１．調査にいたる経過 …… 6
２．調査の経過 …… 6

第３章　遺構

１．溝 …… 8
２．掘立柱建物 …… 10
３．土壙 …… 12

第４章　遺物 …… 14

第５章　まとめ …… 19

挿図目次

第１図　吉田城址周辺地形図（１／45,000）……1
第２図　吉田城址周辺遺跡分布図（１／25,000）……3
第３図　江戸時代吉田城の構造（１／10,000）……5
第４図　調査区と周辺の地籍図（１／5,000）……5
第５図　調査区位置図（１／2,500）……7
第６図　発掘調査区位置図（１／120）……7
第７図　調査区全体図（１／60）……9
第８図　ＳＤ－１・２，ＳＢ－１・２・３平面・断面図（１／60）……11
第９図　ＳＢ－４・５・６，ＳＫ－１・２平面・断面・出土状況図（１／10・１／60）……13
第10図　出土遺物実測図（１／３）……16
第11図　外堀土塁・調査区関係図（１／2,500）……21
第12図　遺構変遷図（１／160）……21

表目次

第１表　出土遺物観察表……18

写真図版目次

図版１－１　調査区全景（北西から）
　　２　調査前状況（北東から）
　　３　ＳＤ－１内集石（北から）
　　４　ＳＤ－１　土層（南から）
　　５　ＳＢ－１　柱穴断ち割り（西から）
　２－１　ＳＢ－２　遺物出土状況（北から）
　　２　ＳＫ－１　遺物出土状況－１（南から）
　　３　ＳＫ－１　遺物出土状況－２（南から）
　　４　調査風景（南西から）
　　５　現存する外堀の土塁（南東から）
　３　出土遺物－１
　４　出土遺物－２

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地（第１図）

吉田城址は豊橋市今橋町に所在する、縄文晩期から近代までの遺構・遺物が確認される遺跡である。豊橋市は東を山地、南・西を海に限られており、一級河川である豊川が貫流し、三河湾に注いでいる。市域は北東部が低山地、南部一帯が河岸段丘、そして西部付近が沖積平野で構成されるが、大半は、豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身である古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面（天伯原面・標高30～60ｍ）、中位面（高師原面・豊橋上位面・標高15～30ｍ）、低位面（豊橋面・標高４～10ｍ）の大きく３面に分けることができる。

吉田城址の所在する河岸段丘・低位面（豊橋面）は、標高３～10ｍで、段丘面上は平坦であるが、この面はさらにⅠ～Ⅲ面に分けられる。この内Ⅰ面は吉田城址および牟呂町坂津付近に見られ、周囲より１～２ｍ高い。低位面（豊橋面）は水はけがよく、沖積平野や海浜部に隣接し、また洪水など水害を避けられるため、古くから人々の居住する所となり、市内でも遺跡の集中するところである。

吉田城址は、Ⅰ面北端部に位置しており、標高は10ｍ前後である。北に隣接して豊川・朝倉川が西流しており、城背面の自然の防御として利用されている。吉田城址からは北方の沖積平野、南東から南西の河岸段丘上を広く見渡すことができ、城下や街道、水上交通路の把握・監視が可能であった。

参考文献

豊橋市教育委員会他　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址（Ⅰ）』1994

第１図　吉田城址周辺地形図（1／45,000）

2．歴史的環境

吉田城址の所在する河岸段丘・低位面上は、市内でも遺跡の集中するところとして知られている。以下、周辺遺跡および吉田城の概要について述べたい。

A.周辺の遺跡

縄文時代では、吉田城址の北東4.7kmに所在する大清水遺跡、および石塚貝塚（9）、五貫森貝塚（3）、大蛟里貝塚（4）などがある。大清水遺跡からは縄文時代早期の楕円押型文土器（高山寺式）が出土している。また石塚貝塚はハイガイを主体とする縄文前期の貝塚である。五貫森貝塚・大蛟里貝塚はヤマトシジミを主体とし、ともに晩期に属する。その他、西側遺跡（16）、洗嶋遺跡（18）、おいほて遺跡（19）などで遺物が確認されており、平成５年度の吉田城址の調査でも、樫王式の深鉢片が出土している。

弥生時代では、吉田城址の北東4.1km付近に白石遺跡、高井遺跡、および浪ノ上遺跡（13）などがある。白石遺跡では、発掘調査により環濠が検出され、そこから遠賀川式土器の壺・甕などが出土している。高井遺跡では、平成３・４年の発掘調査で、環濠から大量の寄道・欠山式を主体とする土器が出土した。その他、西側遺跡、洗嶋遺跡、東田遺跡（23）、緑遺跡（８）などで弥生時代の遺構・遺物が確認されている。また、吉田城址内に所在する飽海遺跡も弥生中期の遺跡と言われている。

古墳時代では、首長墳として東田古墳（21）、初期群集墳として稲荷山古墳群（12）などが挙げられる。東田古墳は前方部を西に向けた全長40ｍの前方後円墳で、過去に後円部頂から鳥文鏡・大刀が、墳丘表面から円筒・形象埴輪が出土しており、５世紀前葉の造営と考えられる。その他の首長墳として、豊川右岸の自然堤防上に、前方後円墳のごんぞうぼう古墳（５）が存在したという。稲荷山古墳群は方墳を主体とし、周辺に所在する森岡・高井・浪ノ上古墳群と同様の、５世紀後葉～６世紀前葉に築かれた初期群集墳と思われる。また古墳時代の遺物のまとまった出土は付近では乏しいが、西小鷹野遺跡は同時代の遺跡といわれている。今までの吉田城址の発掘調査では、銅鏃や円筒埴輪片などの古墳遺物、後期の竪穴住居址なども検出されており、吉田城址にかつて古墳・集落址が存在したであろうことを示している。

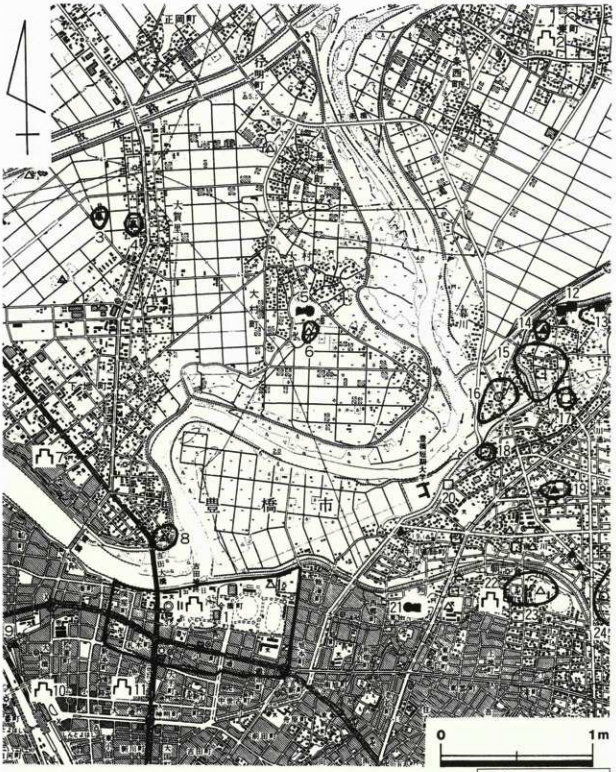
奈良～平安時代では、吉田城址から遺物が広範囲に出土しており、以前の発掘調査で緑釉陶器の碗も出土している。吉田城址付近には平安時代に伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御薗が存在したといわれており、遺物の内容や出土状況との関連性が推察される。

鎌倉・室町時代では、吉田城址付近で集落址の遺構が検出されている。

戦国時代では、吉田城のほか、付近に戸田氏の築いた二連木城址（22）、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址（11）、清源寺砦址（10）などがある。

江戸時代には、吉田城が吉田藩の中枢として機能し、東海道の宿場町という性格もあわせ、城下町は繁栄した。また19世紀には牛川窯（20）が開窯し、小規模な操業をしたようである。

明治時代以降には、吉田城跡地に歩兵第十八聯隊が設置され、数々の軍用建物が建てられた。



1 吉田城址
2 下条館址
3 五貫森貝塚
4 大蚊里貝塚
5 ごんぞうぼう古墳
6 塩田遺跡
7 下地館址
8 緑遺跡
9 石塚貝塚
10 清源寺砦址
11 喜見寺砦址
12 稲荷山古墳群
13 浪ノ上遺跡
14 熊野遺跡
15 東側遺跡
16 西側遺跡
17 中郷遺跡
18 洗嶋遺跡
19 おいほて遺跡
20 牛川焼窯跡
21 東田古墳
22 二連木城址
23 東田遺跡
24 西小鷹野遺跡

古墳
城館
▲ 縄文時代の遺跡
△ 弥生時代の遺跡
○ 古墳時代の遺跡
□ 歴史時代の遺跡

第２図　吉田城址周辺遺跡分布図 (1／25,000)

B.吉田城の歴史と構造

吉田城は、永正2（1502）年に牧野古白によって築かれ、当初は今橋城と称していた。この城は牧野・戸田両勢力の中間に置かれたため、16世紀前葉にはしばしば両者による争奪戦がくり返された。16世紀中葉には西三河の松平氏、次いで遠江・駿河の今川氏の領有下となったが、城主が比較的安定するのは松平家康の三河統一により、重臣の酒井忠次が入城して以後のことである。忠次の城郭整備に関する文献上の記述はないが、平成5年度の吉田城址発掘調査では、16世紀中葉と考えられる堀2条が検出されており、城域拡張などの実施が推定される。家康の関東移封後は、羽柴秀吉の家臣である池田輝政（吉田在城時は照政）が城主となり、城域の拡張・整備、城下町の整備などを実施したが、関ヶ原の合戦後、工事未完成のまま姫路へ転封した。輝政の整備により、吉田城は東西1,400m、南北600m、面積840,000㎡を測る広大なものとなったが、後に入城した少禄の城主達は、城の維持に苦慮したといわれている。明治維新後建物は破却され、堀も埋め立てられ、跡地に歩兵第十八聯隊が設置された。さらに終戦後も堀の埋め立てが実施され、現状の姿になった。

吉田城は築城後、拡張・整備が重ねられ、江戸時代に至っている。江戸時代の構造は現存絵図、および地籍図から復元可能（第3図参照）であるが、戦国時代の姿は記録が乏しく、発掘調査で検出された遺構から断片的に推定されるに過ぎない。江戸時代の吉田城は、本丸を中心にして、二の丸、三の丸、さらに武家屋敷群が取り囲み、背後の豊川を自然の要害とした「半輪郭式」構造をとる。戦国時代の吉田城の構造については不明瞭だが、過去に行われた発掘調査では、各所で同時代の堀が検出されている。それらは江戸時代の三の丸以内の堀位置に近接するものが多く、戦国時代の城域（酒井忠次の城主期）は、少なくとも江戸時代の三の丸範囲と同規模ではなかったかと考えられる。また江戸時代の吉田城に見られる金柑丸は、構造上馬出しとして利用されたとは考えられず、門・塀以外に建物などがおかれた形跡がない中途半端な曲輪である。これが戦国時代からの名残をとどめていると考えられ、輝政の整備した吉田城が、戦国時代の構造を一部踏襲している可能性を示唆している。なお吉田城の石垣は、本丸周辺、門、水門、および二の丸の堀の一部に施されたのみである。

今回の調査区は、江戸時代の吉田城の東端、外堀に接する位置に所在する。三州吉田城図（国立公文書館蔵）によれば、元は足軽屋敷地、後には一般藩士の屋敷地となった所である。地籍図を現状地図に投影し、屋敷割を『吉田藩士屋敷図（豊橋市美術博物館所蔵・天保～嘉永頃作）』と照合した結果、調査地付近は幕末に川村定蔵、あるいは西岡円一郎邸であった所である。

参考文献

豊橋市史編集委員会　『豊橋市史　第1巻』　1973

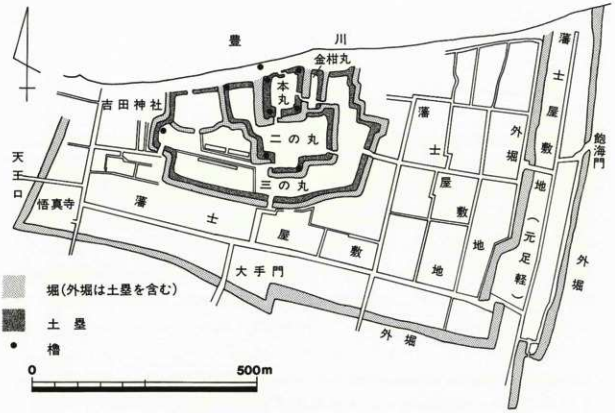
木下克己　『愛知県八名郡の先史遺跡』　1975

豊橋市教育委員会　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集
牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』　1991

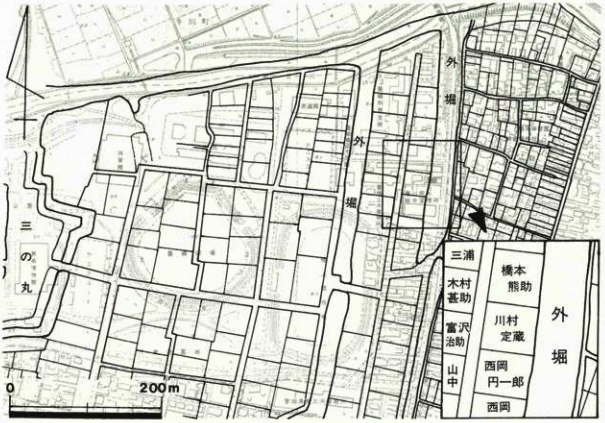
（財）愛知県埋蔵文化財センター　『吉田城遺跡』　1992

豊橋市教育委員会他　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址（Ⅰ）』　1994

豊橋市教育委員会　『吉田城いまむかし』　1994



第3図　江戸時代 吉田城の構造（1／10,000）



第4図　調査区と周辺の地籍図（1／5,000・藩士名は「吉田藩士屋敷図」による）

第２章　調査の経過

１.調査にいたる経過

平成６年６月に愛知県土地改良事業団体連合会より、豊橋市今橋町18に所在する土地改良会館のうち、木造部分の鉄筋コンクリート造り建物への改築計画がなされ、建築確認申請の合議が教育委員会文化振興課に提出された。教育委員会では、現地が吉田城址の範囲に含まれる可能性が高いことから、当教育委員会と愛知県教育委員会、及び事業者である愛知県土地改良事業団体連合会の３者で協議し、試掘調査を行い埋蔵文化財の所在の有無を事前に確認することに決定した。

試掘調査は６月30日に行った。建設予定地に木造の既存建物が存在したため、掘削可能な駐車場利用部分に２×１ｍの調査グリット１ヶ所を設けて実施した（第６図参照）。調査の結果、現地表から50㎝下で溝、あるいは土壙と考えられる落込み１ヶ所を検出し、遺構埋土から江戸時代の摺鉢片１点が出土した。既存建物が木造のため、基礎が遺構面まで恐らくおよんでいないこと、隣接する愛知県土木事務所敷地内で愛知県教育委員会が平成５年度に実施した試掘調査でも、遺構・遺物が確認されていることから、該当地に遺構が存在することはほぼ間違いないと判断した。

この結果をふまえて市教委と事業者で再協議し、建設部分90㎡について事業者の調査費負担で発掘調査を行うことで合意した。本調査は平成６年９月１日～９月13日にかけて行った。調査の結果、鎌倉時代～江戸時代の掘立柱建物と室町～戦国時代の溝、明治時代の溝などが検出された。なお、現地は調査終了後建設工事に移行している。

２.調査の経過

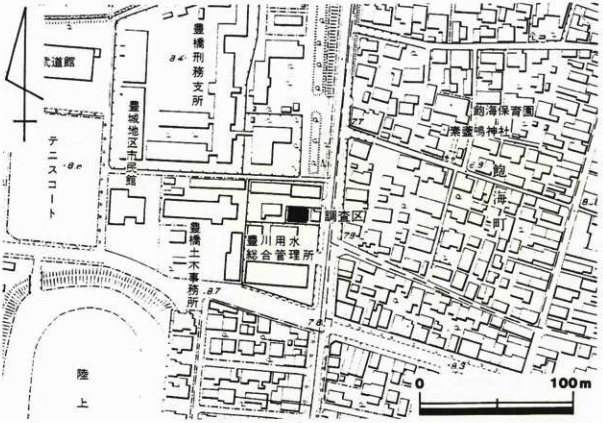
試掘調査は小範囲であったため、すべて人力で行った。また本調査は次の行程で実施した。

９月１日　事業者の用意した重機を使用して表土剥ぎを行う。機材搬入。

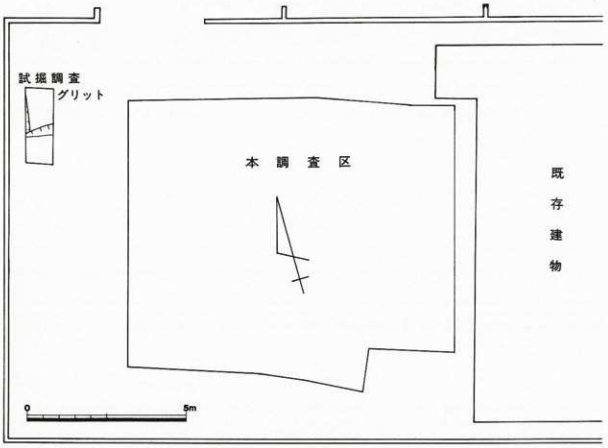
９月５～９日　遺構検出作業を開始する。遺構検出面は地山面である。遺構は調査区東半に密集している状況が見て取れた。９月８日からは関係図面の作成も開始する。

９月12日　高所作業車を使用し、調査区全景の写真撮影を行う。

９月13日　午前中に図面作成、機材搬出。すべての作業を終了する。



第5図　調査区位置図（1／2,500）



第6図　発掘調査区位置図（1／120）

第3章　遺構

遺構は調査区の東半に集中する傾向にあった。これは遺構の性格に関連すると思われるが、一方で後述するように、東半が江戸時代の土塁下に位置した結果とも考えられる。

今回の調査では溝（ＳＤ）２条、掘立柱建物（ＳＢ）６棟分以上、土壙（ＳＫ）等の遺構が検出されている（第７図）。ここでは各遺構を種類毎に説明し、土壙に関しては主に遺物の出土したもののみを記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値である。

基本層序は、一部遺物包含層と考えられる暗茶褐色土層が確認されたが、基本的には表土直下が地山面であり、遺構検出もそこで行っている。地山面は調査区内の西から東に向け、緩やかに下り傾斜となっており、調査区の西端と東端でレベル差は20cmある。

１.溝

ＳＤ－１（第８図）

ＳＤ－１は調査区を南北に貫通するもので、主軸は江戸時代の外堀方向とほぼ同一のＮ－７°－Ｅ、規模は長さ9.1ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.5ｍである。調査区中央付近で溝は途切れ、掘り残しによる幅1.35ｍの陸橋を形造る。また陸橋の南側の溝は東西に方形の張り出しを２ヶ所づつ持ち、北側の溝にも円形の張り出しが３ヶ所認められる。溝の断面は台形を呈し、底は平坦でレベルはほぼ一定である。

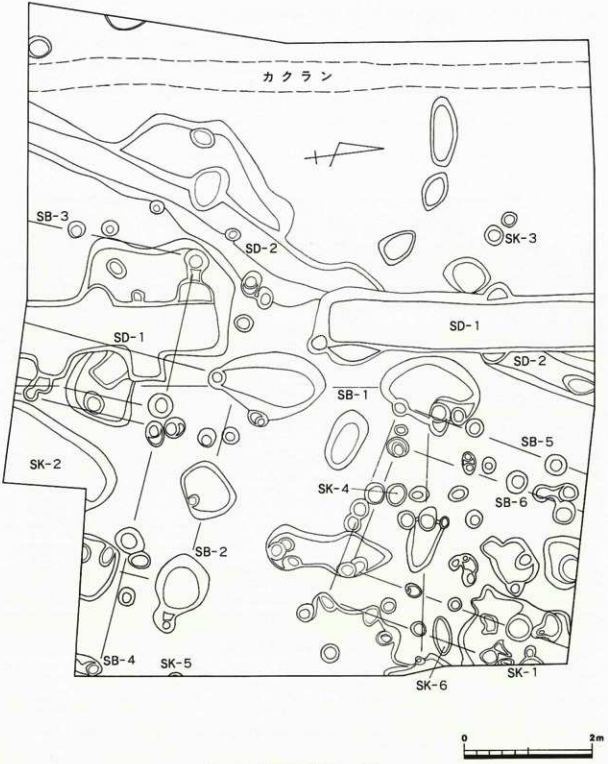
溝内に堆積した埋土は２層であった。茶褐色砂質土層は多量の礫を含み、人為的な埋め戻しによる土と考えられる。暗灰色砂質土層はやや粘性を持ち、ＳＤ－１が滞水状態にあったことを示している。遺物の大半はこの層から出土した。また多数の腐食した木板片が出土しており、調査区の南端付近で溝の側・底面に板が張られた状況が確認されたことから、当初は板張りだったようである。その他、陸橋の北側付近に多数の礫が廃棄されており、集石状を成していた。

出土遺物に明治時代のものが認められるため、本遺構は歩兵第十八聯隊に関連するものであろう。滞水状態にあったことから側溝、あるいは地割溝ではないかと考えられる。

ＳＤ－２（第８図）

ＳＤ－２は調査区を北東から南西にかけて貫通するもので、主軸はＮ－30°－Ｅ、規模は長さ10.2ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.08ｍである。現状では非常に浅いが、これは後世の削平のためと考えられる。底のレベルはほぼ一定である。埋土は暗茶褐色砂質土１層からなり、溝の北東端及び中央付近で遺物がまとまって出土している。

ＳＤ－２は主軸が後述するＳＢ－３～６と近似しており、これらに関連する施設と考えられる。出土遺物には15世紀～16世紀前葉のものが認められ、恐らく同時期の屋敷地（集落、あるいは吉田城に伴う家臣の屋敷地）を区画する溝であろう。



第7図　調査区全体図（1／60）

2．掘立柱建物

ＳＢ－１（第８図）

ＳＢ－１は２間（以上）×２間（以上）の建物である。主軸はＮ－８°－Ｅで、外堀の主軸とほぼ一致し、他の掘立柱建物とは異なるものである。規模は現状で南北5.2ｍ（以上）、東西4.5ｍ以上（柱穴の中心間を測定：以下掘立柱建物の規模計測位置は同じ）を測り、柱間はおよそ2.6ｍである。柱穴は方形、楕円形など形態が不統一で、深さも浅く、大きさ1.0～1.6ｍ、深さ0.15～0.2ｍ程度のものが多い。埋土は茶褐色砂質土のみで、柱痕は確認されない。

柱穴からは遺物が１点も出土していないため、ＳＢ－１の正確な時期は不明である。ただし主軸が外堀と一致する点や、柱穴が不整形な点から、池田輝政の城郭整備時に建てられたものと考えられる。一方で、ＳＢ－１付近は江戸時代の土塁下に位置すると考えられ（後述）、輝政の縄張り～外堀普請という短期間に存在した建物と推定される。

ＳＢ－２（第８図）

ＳＢ－２は２間×１間（以上）の建物である。主軸はＮ－16°－Ｅである。規模は現状で南北1.7ｍ（以上）、東西3.5ｍを測り、柱間は東西柱間の場合およそ1.7ｍである。柱穴は形態にばらつきが見られるが、方形を主体としており、大きさ0.9ｍ、深さ0.2ｍ前後を測る。埋土は茶褐色砂質土である。柱痕は確認されない。

柱穴からは中世陶器・碗の底部（第10図24）が出土しており、建物自体は13世紀中葉～14世紀初頭のものと思われる。柱穴はＳＢ－３～６と比較して明らかに大きく、根本的な性格の違いを示すと考えられる。

ＳＢ－３（第８図）

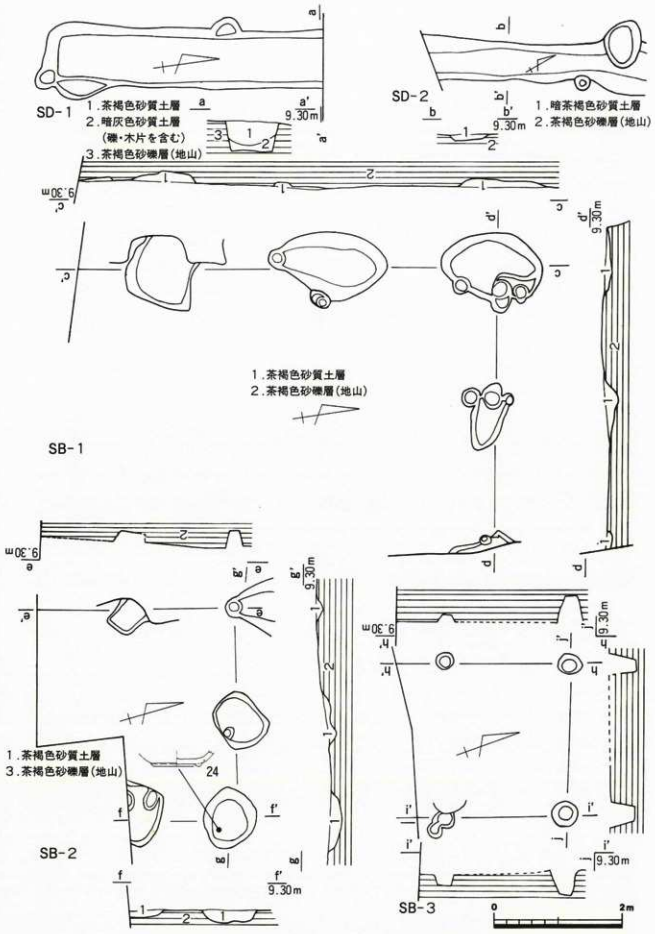
ＳＢ－３は１間（以上）×１間の建物である。主軸はＮ－23°－Ｅである。規模は現状で南北1.95ｍ（以上）、東西2.4ｍを測る。柱穴は円形で、径0.3～0.4ｍ、深さは約0.15ｍと0.4ｍの２者が認められる。埋土は茶褐色砂質土で、柱痕は確認されない。出土遺物はない。

ＳＢ－４（第９図）

ＳＢ－４は２間（以上）×１間（以上）の建物である。主軸はＮ－23°－Ｅである。規模は現状で南北2.1ｍ（以上）、東西4.0ｍ（以上）を測り、柱間はおよそ2.0ｍである。柱穴は円形で、径約0.3ｍ、深さは0.3～0.45ｍを測る。埋土は茶褐色砂質土で、柱痕は確認されない。出土遺物はない。

ＳＢ－５（第９図）

ＳＢ－５は２間(以上)×２間の建物である。主軸はＮ－27°－Ｅである。規模は現状で南北2.7ｍ(以上)、東西3.25ｍを測り、柱間は南北柱間の場合およそ1.35ｍである。柱穴は円形で、径約0.3ｍ、深さは約0.3ｍを主とするが、浅いくぼみ状のものも認められる。埋土は茶褐色砂質土で、柱痕は確認



第8図　SD－1・2、SB－1・2・3 平面・断面図 (1/60)

されない。出土遺物はない。

ＳＢ－６（第９図）

ＳＢ－６は３間（以上）×２間の建物である。主軸はＮ－27°－Ｅである。規模は現状で南北2.9ｍ（以上）、東西2.1ｍを測る。各柱間は不統一であるが、桁行側における対面の間隔は同じで、南から1.1ｍ、0.7ｍ、1.1ｍとなる。柱穴は円形で、径0.25～0.4ｍ、深さは0.15～0.45ｍを測るが、深さの違いは地山面のレベル差も一部起因している。埋土は茶褐色砂質土、あるいは暗茶褐色砂質土で、柱痕は確認されない。出土遺物はない。

ＳＢ－３～６は建物主軸や柱穴の大きさが近似しており、それぞれ有機的に関連する遺構群であろう。前述のようにＳＤ－２を伴う屋敷地の建物と推定され、重複するＳＢ－５とＳＢ－６は建物の建て替えを示すと考えられる。これらからの出土遺物はないが、ＳＤ－２と同時期の、15世紀～16世紀前葉の遺構と考えられる。この他、建物としては認定できなかったが、柱穴が多数検出されており、掘立柱建物の数は更に増えると思われる。

３.土壙

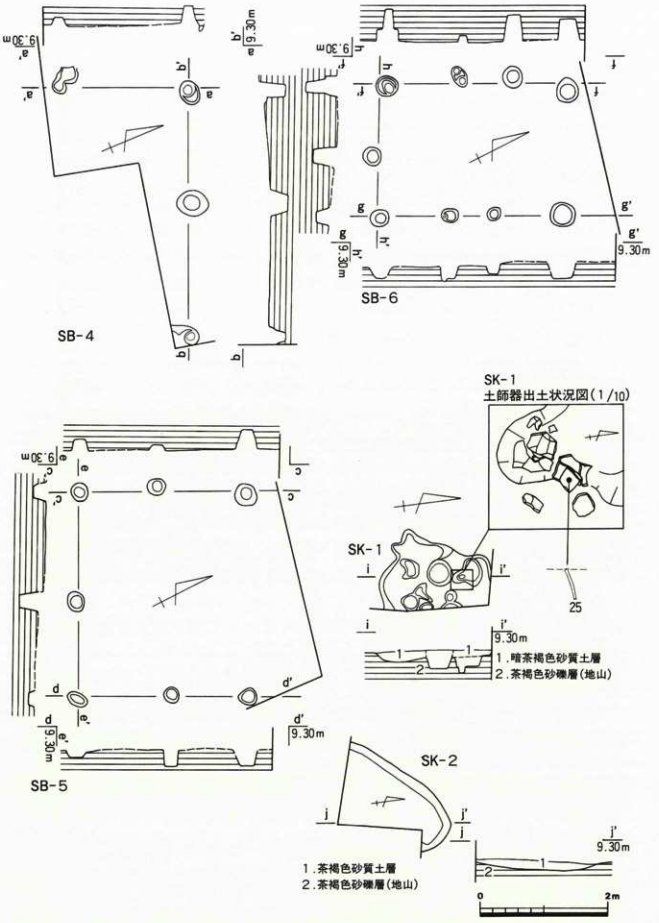
ＳＫ－１（第９図）

調査区の北東端で検出されたため、正確な形態や規模は不明だが、現状で南北1.75ｍ以上、東西1.25ｍ以上、深さ0.15ｍを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。平安時代以前のものと考えられる土師器・甕（第10図25）などが床面から高さ５～10㎝の位置で出土している。

ＳＫ－２（第９図）

調査区の南端で検出されたため、正確な形態や規模は不明だが、現状で南北1.8ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.15ｍを測る。出土遺物に土師器・鍋（第10図27）が見られ、16世紀の遺構と考えられる。ＳＤ－２、ＳＢ－３～６に伴う廃棄土壙の可能性がある。

その他遺物が出土した主な遺構について、第７図にＳＫ－３～６として示した。大半が柱穴、あるいはくぼみ状の浅い土壙である。



第9図　SB－4・5・6、SK－1・2平面・断面・出土状況図（1／10・1／60）

第４章　遺物

出土した遺物は、コンテナ（34×54×20cm）に２箱程と量は少ないが、大半は遺構に伴うものであった。ここでは出土遺物を遺構毎に分け、溝（ＳＤ）、掘立柱建物（ＳＢ）、土壙（ＳＫ）、その他の遺構、表土の順番で説明する。

ＳＤ－１（第10図１～16）

１は須恵器・甕の体部である。外面には平行タタキ目が認められる。内面の当て具痕がナデ消されていることから、奈良時代のものと考える。２は中世陶器・皿の底部で、回転ヘラ切り痕が見られる。藤澤良祐氏の南部系山茶碗編年（藤澤1990・以下中世陶器の編年はこれによる）の第５～６型式に相当する。３は産地不詳の碗で、鉄釉が内外面に施される。４は瀬戸美濃窯産の丸碗で、内外面には鉄釉が施される。高台は露胎で、削り出しにより直立気味に仕上げられる。藤澤良祐氏の瀬戸本業焼（登窯）編年（藤澤1989・以下近世瀬戸美濃窯産陶器の編年はこれによる）のⅡ－７期に相当する。５は内外面に灰釉の施された丸皿で、高台は削り込みである。器壁が厚い点に問題があるが、藤澤良祐氏の大窯製品編年（藤澤1994・以下大窯製品の編年はこれによる）の第２～３段階に相当する。６は瀬戸美濃窯産の摺鉢の口縁で、内外面に鉄釉が施される。藤澤良祐氏の窖窯製品編年（藤澤1991）の後Ⅱ期に相当する。７は常滑窯産の片口鉢と考えられる。口縁は面を形成し、端部は稜を成す。中野晴久氏の常滑窯製品編年（中野1994）の10～11型式に相当すると考える。８は壺類の底部付近で、外面に鉄釉が施されるが、高台付近は露胎である。高台は削り出しによる。９は瀬戸美濃窯産と考えられる甕の口縁で、内外面に灰釉が施される。登窯期のものであろう。10は瀬戸美濃窯産の香炉の口縁で、内外面に灰釉が施される。登窯期のものである。11は内面に灰釉、外面に灰釉と緑釉が施された織部の向付類と考えられる。外面には削り込み、あるいは刺突によって文様を描く。器壁が異常に厚く、明治時代の復古品の可能性がある。12は染付の碗で、内面見込に「年制」の文字が見られる。13は土師器・皿の口縁付近で、緩やかに屈曲しつつ立ち上がり、端部は内へ折り曲げ気味に丸くおさめている。佐藤公保氏の土師器編年（佐藤1986）に従えば、13～14世紀代のものと考えられる。14は土師器・鍋の体部で、中位に鍔を巡らせ、肩には把手が見られることから茶釜形を呈するものといえる。内面は板ナデ痕が顕著である。15は象牙製の煙管の吸口である。明治時代のものであろう。16は銅製のボタンで、桜文が見られる学生ボタンである。恐らく歩兵第十八聯隊に参加した予科練兵らの遺物であろう。その他ガラス瓶なども出土している。

当遺構からは長期に渡る遺物が認められるが、多くは混入品であり、実際に遺構の時期を示すのは吸口や銅製ボタンなどであろう。なお、吸口、ボタンともに当遺構内の集石状になった多量の礫（写真図版１－３）中から出土した。

ＳＤ－２（第10図17～22）

17は灰釉陶器・碗の口縁である。18は中世陶器・碗の口縁で、色調は淡灰色を呈し、胎土は精良で

ある。いわゆる「北部糸山茶碗」である。19は青磁の折縁皿の口縁付近で、釉調から龍泉窯系と考えられる。20は土師器・皿の口縁で、手づくね成形されている。21・22は土師器の鍋で、ともに「くの字口縁」のものである。21は通有の形態をしめすが、22は全体に器壁が薄く、口縁の折り返しも不明瞭で、通常見られるものとは形態が異なる。外面にはハケメが、内面には（板）ナデが施される。内耳は欠損している。

当遺構は屋敷地を区画する溝と考えられる。遺物からみた遺構の年代は、混入品の17・18を除けば、おおよそ15世紀～16世紀前葉内に収まる（土師器の編年については赤木1994）。また本遺構に伴うＳＢ－３・４・５・６も同時期と考えられる。

ＳＢ－２（第10図23・24）

23は灰釉陶器・碗の底部である。高台は貼付けである。24は中世陶器・碗の底部付近である。外面には糸切り痕が認められ、高台は貼付である。渥美窯産で、藤澤編年の第７～８型式に相当する

ＳＫ－１（第10図25）

25は土師器・甕の体部付近であり、わずかに頸部の屈曲部分が残る。摩滅のため調整は不明瞭だが、内外面ともナデと考えられる。器壁は薄く砂粒を多く含み、中世の土師器とは明瞭に区別されるが、現状では平安時代以前のものとしか言えない。

本遺構からは多数の土師器片が出土している（第９図参照）が、多くは図化不能の体部片であった。

ＳＫ－２（第10図26・27）

26は中世陶器・碗の底部である。高台の断面形は方形気味である。27は土師器・鍋で、口縁直下に鍔を巡らす羽釜形のものである。

本遺構の年代は27から導き出される16世紀代と考えられる。

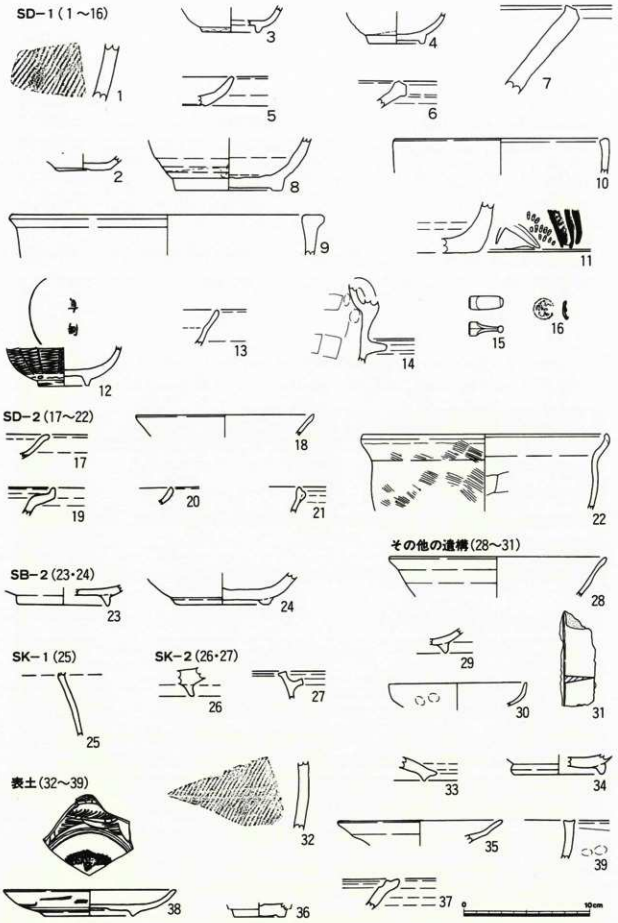
その他の遺構（第10図28～31）

性格不明の遺構、あるいは建物として配置を確定できなかった柱穴などから出土した遺物を一括してここでは説明する。なお、遺構の位置については第７図を参照されたい。

28は中世陶器・碗で、渥美窯産と考えられる。藤澤編年の第５型式に相当する。ＳＫ－５出土。29は灰釉陶器・碗である。ＳＫ－３出土。30は土師器・皿で、手づくね成形されている。ＳＫ－４出土。31は直刀の刃部で、銹化が著しい。断面形から平造と考えられる。ＳＫ－６出土。

表土（第10図32～39）

32は須恵器・甕の体部である。外面には平行タタキ目が見られる。内面の当て具痕がナデ消されていることから、奈良時代のものと考えられる。33は須恵器の蓋で、内面にかえりが見られる。34は灰釉陶器・碗で、Ｋ－90号窯式の可能性がある。35は中世陶器・皿と考えるが、口径が大きく、器高は低く、また体部中位が屈曲するなど形態が通常とは異なるものである。36は瀬戸美濃窯産の天目茶碗



第10図　出土遺物実測図 (1/3)

底部で、高台は削り出しである。内面に鉄釉が施され、外面にも鉄釉が化粧掛けされる。藤澤編年の大窯第１段階に相当する。37は内外面に灰釉が施された瀬戸美濃窯産の折縁深皿である。藤澤編年の後Ⅱ期に相当する。38は染付・皿で、内面見込に菊花が描かれる。39は土師器・鍋で、「半球形」を呈するものである。口縁端部は面を持ち、中央はくぼませる。体部には指頭圧痕が残る。

参考文献

藤澤良祐　「本業焼の研究（３）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』
瀬戸市歴史民俗資料館1989

藤澤良祐　「付編２　山茶碗と中世集落」『尾呂』　瀬戸市教育委員会　1990

藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』
瀬戸市歴史民俗資料館　1991

藤澤良祐　『瀬戸市史　陶磁史篇４』　瀬戸市　1994

中野晴久　「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
日本福祉大学知多半島総合研究所　1994

佐藤公保　「中世土師器研究ノート（Ⅰ）－朝日西遺跡の様相－」『年報昭和60年度』
（財）愛知県埋蔵文化財センター　1986

赤木　剛　「出土遺物について」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址』
豊橋市教育委員会他　1994

第１表　出土遺物観察表

遺物番号	層位・遺構	種　類	法　量（cm）			残存率(%)	胎土	焼成	色調	調　整			備　考
			口径	底径	器高					内　面	外　面	底　部	
1	ＳＤ－１	須恵器・甕					精良	良好	淡灰色	ナデ	平行タタキ		
2	ＳＤ－１	中世陶器・皿		4.4	(1.0)	底100	良好	良好	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	第５～６型式
3	ＳＤ－１	陶器・碗		4.5	(1.8)	底26	精良	良好	淡灰褐色	ロクロナデ 鉄釉	ロクロナデ 鉄釉		産地不詳
4	ＳＤ－１	瀬戸美濃・丸碗		4.5	(2.8)	底90	精良	良好	淡褐色	ロクロナデ 鉄釉	ロクロナデ 鉄釉	削り出し高台	登窯Ⅱ－７
5	ＳＤ－１	瀬戸美濃・丸皿			(2.3)		精良	良好	灰褐色	ロクロナデ 灰釉	灰釉	削り込み高台	大窯第２～３段階
6	ＳＤ－１	瀬戸美濃・擂鉢			(2.3)		良好	良好	灰褐色	ロクロナデ 鉄釉	ロクロナデ 鉄釉		窯窯期
7	ＳＤ－１	常滑・片口鉢			(6.9)		やや良	良好	茶褐色	ナデ	ナデ		10～11型式期
8	ＳＤ－１	瀬戸美濃・壺類		8.5	(4.0)	底36	精良	良好	淡褐色	ロクロナデ	ロクロナデ 鉄釉	削り出し高台	登窯Ⅰ－３
9	ＳＤ－１	瀬戸美濃・甕	24.5		(3.0)	7	やや良	良好	淡褐色	灰釉	灰釉		登窯期
10	ＳＤ－１	瀬戸美濃・香炉	17.0		(2.7)	10	精良	良好	淡褐色	灰釉	灰釉		登窯期
11	ＳＤ－１	瀬戸美濃・向付類？			(3.9)		精良	良好	淡褐色	灰釉	灰釉・緑釉		織部
12	ＳＤ－１	染付・碗		4.0	(3.0)	底55	精良	良好	白色				見込に「年制」
13	ＳＤ－１	土師器・皿			(2.6)		やや良	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ		
14	ＳＤ－１	土師器・鍋			(6.0)		やや粗	良好	茶褐色	板ナデ	ナデ		茶釜形・スス付着
15	ＳＤ－１	煙管・吸口	長さ2.65		径1.0								象牙製・明治期？
16	ＳＤ－１	ボタン	径1.1										銅製・桜文
17	ＳＤ－２	灰釉陶器・碗			(3.0)		精良	良好	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ		
18	ＳＤ－２	中世陶器・碗	14.0		(1.7)	9	精良	良好	淡灰色	ロクロナデ	ロクロナデ		北部系
19	ＳＤ－２	青磁・折縁皿			(3.0)		精良	良好	淡灰白色	青磁釉	青磁釉		龍泉窯系
20	ＳＤ－２	土師器・皿			(1.5)		やや粗	やや不良	淡橙褐色	ナデ	ユビオサエ		手づくね
21	ＳＤ－２	土師器・鍋			(2.0)		やや粗	やや不良	淡黄白色	ナデ	ナデ		くの字口縁
22	ＳＤ－２	土師器・鍋			(5.7)		やや粗	やや不良	淡褐色	ナデ	ハケメ		くの字口縁・スス付着
23	ＳＢ－２	灰釉陶器・碗		7.0	(1.5)	底15	精良	良好	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	
24	ＳＢ－２	中世陶器・碗		7.6	(2.4)	底93	良好	良好	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り 貼付高台	渥美第７～８型式
25	ＳＫ－１	土師器？・甕			(5.5)		粗	不良	淡褐色	ナデか	ナデか		平安以前
26	ＳＫ－２	中世陶器・碗			(1.8)		精良	良好	淡灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	
27	ＳＫ－２	土師器・鍋			(2.0)		やや良	やや不良	淡黄白色	ナデ	ナデ		羽釜形
28	その他	中世陶器・碗	17.0		(3.3)	10	精良	暗灰色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ		渥美？第５型式
29	その他	灰釉陶器・碗			(2.0)		精良	良好	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	
30	その他	土師器・皿	10.1		(1.8)	15	やや良	やや不良	淡褐白色	ナデ	ユビオサエ		手づくね
31	その他	直刀	刃幅2.4		背幅0.55								
32	表土	須恵器・甕					精良	良好	淡灰色	ナデ	平行タタキ		
33	表土	須恵器・壷			(2.0)		精良	良好	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
34	表土	灰釉陶器・碗		7.0	(1.5)	底19	精良	良好	淡灰	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	
35	表土	中世陶器・皿	13.0		(3.0)	9	精良	良好	灰色	ロクロナデ 自然釉	ロクロナデ		
36	表土	瀬戸美濃・天目茶碗		4.0	(1.0)	底48	良好	良好	淡褐色	ロクロナデ 鉄釉	削り込み高台	回転ヘラ削り 鉄釉化粧掛け	大窯第１段階
37	表土	瀬戸美濃・折縁深皿			(3.0)		良好	良好	淡褐色	ロクロナデ 灰釉	ロクロナデ 灰釉		後Ⅱ期
38	表土	染付・皿		7.0	(2.0)	底27	精良	良好	白色				
39	表土	土師器・鍋			(3.0)		粗	やや不良	橙褐色	ナデ	ナデ		半球形・スス付着

第5章　まとめ

今回の調査で、吉田（今橋）城の築城を遡る遺構や、城に伴う建物跡などが検出され、吉田城址付近が長期にわたる遺跡であることが改めて確認された。以下、遺構や遺物を検討し、遺跡の性格を簡単にまとめてみる。

遺構は調査区の東半に集中して検出されている。これは遺跡自体の性格により遺構の分布が希薄になったとも考えられる。しかしこの場合、存在するはずの江戸時代の藩士屋敷遺構がほとんど見られない点が問題となる。これはおそらく明治時代の歩兵第十八聯隊が設置された際に、かなりの造成を行い、上部に位置した江戸時代の遺構が削平されたためと考えられる。すると逆に遺構が良好に遺存した調査区東半については、その理由を考える必要が生じる。

調査区の北にほぼ隣接して豊橋刑務支所があり、この入口に吉田城の外堀に伴う土塁が唯一現存している（写真図版２－５）。土塁は現状で西側が幾分削り取られており、実際の幅は更に広かったと考えられる。土塁幅をおおよそ復元し、地図上において南側に延長復元した場合、調査区東半は土塁下に位置することになる（第11図）。なお土塁は十八聯隊時代にも遺存しており、削平されたのは終戦後のことである。

以上から、調査区東半の遺構は土塁下になったため、比較的良好に遺存したと考えられる。調査区東半から江戸時代の遺物が全く確認されていない点も、その考えを助長しよう。

今回検出された遺構には、掘立柱建物、溝、井戸、土壙等がある。これらの所属時期は大きく５期に分けることができる。各自期をⅠ～Ⅴ期とした場合、以下のような遺構変遷をたどることができる（第12図）。

Ⅰ期（平安時代以前）

ＳＫ－１が存在した時期である。調査区からは須恵器や灰釉陶器が出土しており、付近に平安時代以前の遺構が広く存在したと考えられる。

Ⅱ期（13世紀中葉～14世紀初頭）

ＳＢ－２が存在した時期である。同時期に吉田城址付近には伊勢神宮領の鮑海神戸、吉田御薗などが存在した（注１）といわれており、またそれに関連すると考えられる、集落遺構（溝、建物跡）なども以前の発掘調査で検出されている。ＳＢ－２も集落に伴う遺構と考えられるが、柱穴が大きく、用材面から卓越した内容の建物であったことが推定され、一般の住居とは区別されるべきものである。

出土遺物は中世陶器・碗の底部のみであるが、残存率が高いので遺構の時期を示すものと考えて良いだろう。

なお鮑海神戸は、天慶３（940）年に平将門の乱平定に対する報賽として、朝廷から伊勢神宮に寄贈されたものである。現存する安久美神戸神明社がその中心であり（当時の所在地は現在と異なる）、神戸の管理や租税の収納などを実施したようである。なお、神戸内の集落構成については文献記録が乏しいため不明な点が多い。鮑海神戸、吉田御薗ともに15世紀まで存続している。

Ⅲ期（15世紀～16世紀前葉）

ＳＤ－２、ＳＢ－３・４・５・６、およびＳＫ－２が存在した時代である。遺構は集落の一部、あるいは吉田城に伴う家臣の屋敷地と考えられる。遺構に見られる主軸は、平成５年度の調査に際し検出された吉田城家臣団屋敷地のそれと類似している（注２）。Ⅰ期のＳＢ－２も主軸がこの方位と一致しており、鎌倉時代から吉田城址周辺で採用されたものといえる。この建物主軸は、市内下条～石巻地区に遺存していた条里制的地割の主軸と近似するようであり（注３）、恐らくこれに合わせたものと考えられる。

出土遺物にはＳＤ－２から出土した輸入磁器・折縁皿や土師器・鍋・皿などがあり、土師器からこの時期が推定される（注４）。

Ⅳ期（16世紀末葉）

ＳＢ－１が存在した時代である。ＳＢ－１は主軸が外堀と一致しており、池田照政の城郭整備時に建てられたものであろう。前述のように江戸時代の調査区東半は土塁下に相当し、ＳＢ－１は外堀造成（土塁造成）時にはすでに存在しなかったと考えられる。幕末には、川村定蔵邸、あるいは西村円一郎邸が付近に存在したはずだが、削平を受け遺構はほとんど遺存しない。

Ⅴ期（18世紀後葉）

ＳＤ－１が存在した時代である。この時期、周辺は歩兵第十八聯隊の射的場として利用されていた（注５）。ＳＤ－１は土塁際に存在した側溝、あるいは地割溝と考えられる。

出土遺物には江戸時代の陶磁器、明治時代のガラス瓶、銅製ボタンなどがある。

以上、今回の調査では、吉田城址に関連する遺構はＳＢ－１のみにとどまったが、城址周辺に中世の集落遺構が広く存在していることが判明した。これら集落は条里制的地割と主軸方向を一致させており、逆にいえば付近における条里制的地割の施行年代は鎌倉時代まで遡るといえる。その後、地割の主軸は室町～戦国時代にかけて大きく変化しておらず、過去に吉田城址で検出された家臣団屋敷地の地割を含め考えれば、周辺の集落は池田輝政による大規模な整備以前まで、若干の変更をとげつつも、基本的な主軸を鎌倉時代から変化させていないといえる。

今後吉田城址の調査を重ねることにより、吉田城設置前の集落状況、城の設置にいたる過程の復元などが可能となろう。

注１　豊橋市教育委員会他　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址（Ⅰ）』　1994

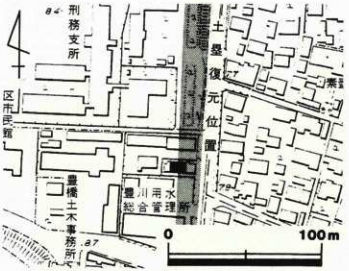
注２　注１に同じ。

注３　豊橋市史編集委員会　『豊橋市史　第１巻』　1973

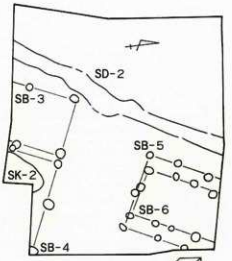
調査区から北へ250ｍの沖野地区にも条里制（的）地割が存在したといわれている。ただしその地割の実態については不明である。

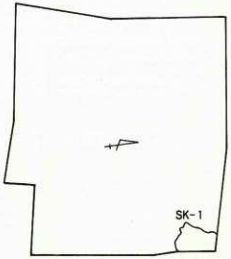
注４　赤木　剛　「出土遺物について」　注１に同じ

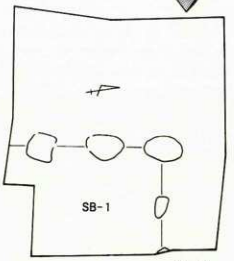
注５　『豊橋町及ヒ下地町近傍地図』（明治26年作成・豊橋市美術博物館蔵）によった。

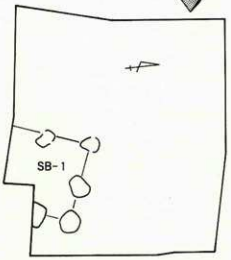


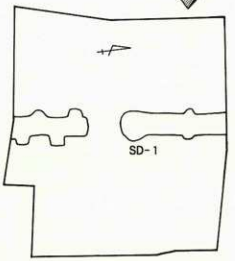
第11図　外堀土塁・調査区関係図（1／2,500）











第12図　遺構実測図（1／160）

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ヨシダジョウシ
書　　名	吉田城址（II）
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編 著 者 名	岩原　剛
編 集 機 関	豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会
所 在 地	〒４４０　愛知県豊橋市向山大池町20-1（豊橋市民文化会館内）TEL 0532-61-5111
発 行 年	西暦１９９５年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヨシダジョウ 吉 田 城	トヨハシシ 豊橋市 イマハシチョウ 今橋町18	23201	79393	34° 46′ 0″	137° 24′ 10″	940901 940913	90	土地改良 会館改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
吉田城	城址・ 集落址	平安以前 鎌倉 室町 戦国 江戸 明治	溝　2 掘立柱建物　6 土壙等	須恵器、灰釉陶器、 土師器、中世陶磁器、 近世陶磁器、直刀、 近代遺物	

写　真　図　版

１．調査区全景（北西から）

２．調査前状況（北東から）

３．ＳＤ－１内集石（北から）

４．ＳＤ－１　土層（南から）

５．ＳＢ－１　柱穴断ち割り（西から）

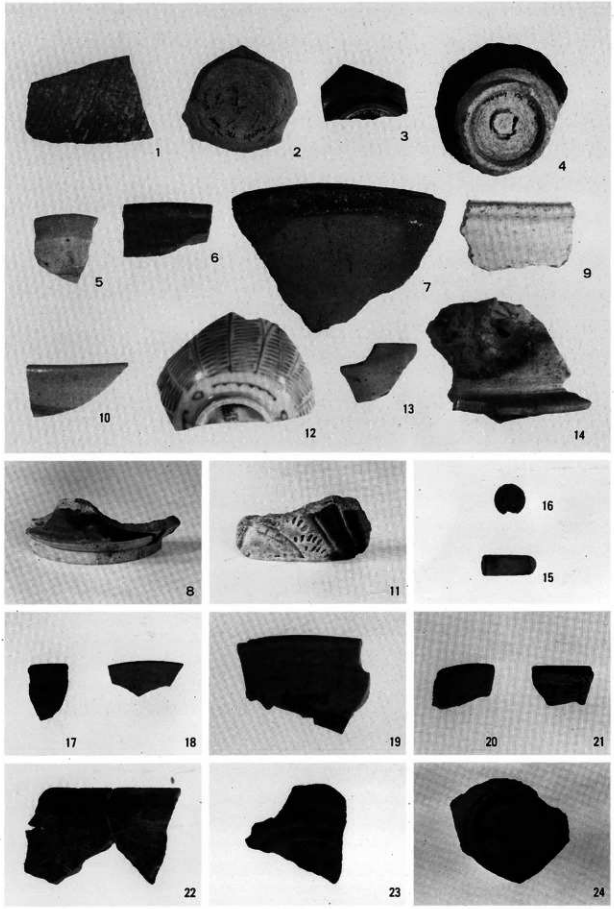
１．ＳＢ－２　遺物出土状況（北から）

２．ＳＫ－１　遺物出土状況－１（南から）

３．ＳＫ－１　遺物出土状況－２（南から）

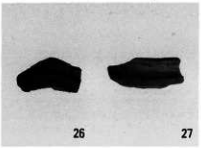
４．調査風景（南西から）

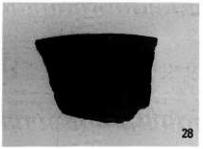
５．現存する外堀の土塁（南東から）

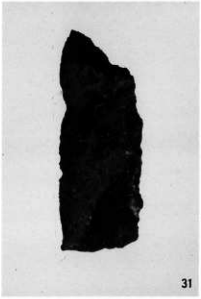


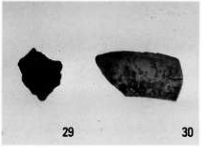
出土遺物－1

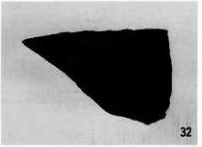
25

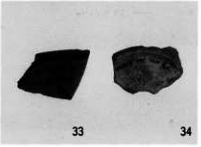

26 27

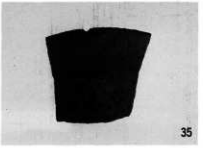

28

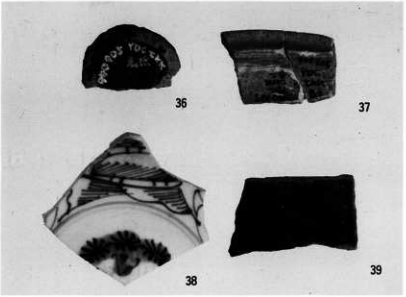

31


29 30


32


33 34


35



36 37 38 39

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集

吉　田　城　址（II）

1995年３月31日

発　行　豊橋市教育委員会©
文化振興課
豊橋遺跡調査会

〒４４０　豊橋市向山大池町20-１

印　刷　株式会社 豊橋印刷社